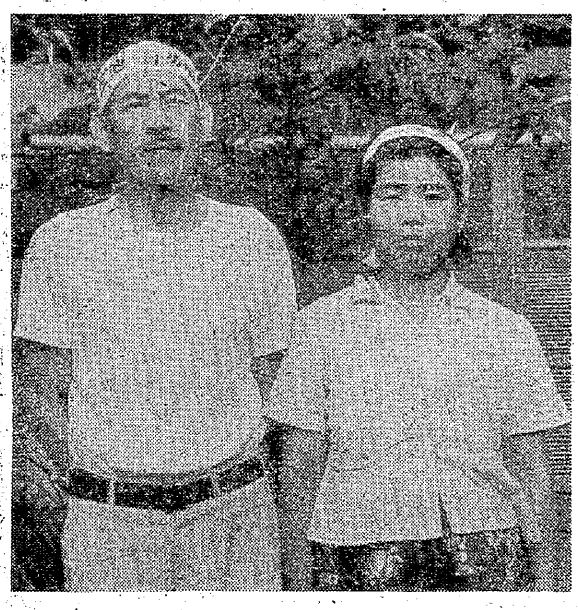
原告団

遺族・CO裁判、災害責任追求、特集号　第七十号



上の写真は、三池闘争中夫婦でちよつと。もはや、その人はいない。左の写真は、炭労の政転闘争のとき上京、中央ではげしい行動もすみ、大牟田にひき揚げるとき東京駅で。後列まん中の人が、故人。鼻ヒゲに、故人の人柄がしのばれ、さぞかし語り草も多いことだろう。

原告団レポート

遺族――今井富子さん

さんざんだった生涯

忘れ得ぬ、つかの間の夫とのしあわせ

引き揚げ生活に重なる災害

次女の恵子さんと。「遠おに適令期を過ぎているのにその気になつてくれず、これだけが胸を痛めています」、と今井さん。きつと、母親の身を心配してか。

ついに病む

昭和三十八年のあの三川鉱大爆発で、夫の正義を亡くしましたとき、私は四十七歳で（大正五年五月十日生れ）、夫が五十三歳（明治四十三年三月十六日生れ）でした。

結婚したのは昭和十三年七月二十七日。私が二十二歳で、夫が二十八歳のときのことです。

私には長女の邦子（昭和十四年四月十一日生れ）、長男の俊輔（同十六年一月三日生れ）、次男の隆義（同十八年四月十一日生れ）、それに次女の恵子（同二十三年二月八日生れ）という、四人の子どもがあります。

夫が先立っていったとき、この子どもたちは、うえから三人はもう学校を終え世にでていましたけど、下の子どもはまだ高校に通っていました。

私はあれからずっと荒尾アソニット工場に、遺族なかまといっしょに働いてきていますけど、昨年の十一月から休みついてもう半年近くなります。医者から心臓が悪いといわれたので大学病院で診療をうけるようにと紹介状をいただいているのです。長い間、あまり体を酷使したことから、こんなことになってしまったのです。

今年私は六十歳。もう無理はできません。思えば、私の生涯はさんざんでした。

台湾引揚げ

私の不幸は、日本が太平洋戦争に敗れたのと同時にはじまりました。

その頃私は、台湾の花蓮港近くの町で暮らしておりました。夫は終戦前年の十九年に召集をうけまして、同じ台湾の高尾の軍隊にいましたけど、もともと警察官だったのです。

まだ恵子は生れていず、子どもは三人だったのです。でも、引き揚げ後は途方に暮れました。

私たちは二十一年の四月に台湾から引き揚げたものの、母国だとはいえどこで生きてゆくあてもなく、夫の郷里の四国を頼って帰って行くまいりました。

夫の両親はすでに亡く、やむなく夫のオジさん宅に落ちついたのです。

ところが四国は前の年に大型の台風ですっかり荒らされてしまって、植えつけ用の野菜のタネさえない状態だったのです。そのため土地で生きている人たちでさえ、食べるものがなかったほどですから、七つと五つと三つの子どもをもつ引き揚げ家族には、楽に生きて行く道なんかありませんでした。

万田坑入社

一カ月分のお米の配給は一週間分しかなく、お野菜を貰おうにも農家自体が口に入れるものさえないのです。ですから、歯を食いしばって親子総出で、のびりが生えるときはのびりを、つぐしがでるときはつぐしを、せりを、ふきを、と、野の野菜摘みに真剣だったことを決して忘れはいたしません。

かといって、四国の田舎では、働きに出ようにも夫の職場はなく、とうとう苦しまぎれに、私の郷里の荒尾の金屋へ越してきたのでした。

ここでも一軒の家に、満洲そのほかからの引き揚げばかり、五家族が住むという具合いで、苦しさはつづきました。

私の実家の山を頼んでおカユをすすりすすり、開墾させてもらいました。ふらふらでした、ほんとに。

そこへ、夫に原職復帰（警察官）の誘いがきたのです。その道が一番だ、とはわかっていましたけど、でも住むにもかんじんな家がなかったのでした。

「ああたが兵隊にいったときのことを思えば、二度と別れ別れに暮らすなどいやです。たとえ乞食してもいいから、あくまで一緒に……」と、私はそのときがんばったんです。

二十二年のたしか十一月、夫は万田鉱（その後廃坑となり、三川鉱に合併）にはいりました。

かけがえのない夫の命を、三井の犠牲にささげたのは、たれでもないこの私です。私があのとき、夫の原職復帰に反対してさえいなかったならば、夫はいまも元気で闘っていたはずですし、また私たちもこんな悲しい暮らしをすることもなかったんです。

どれほど、あの人と一緒にあの世にいきたい、と思ったことだったか。でも、私には夫から託された子どもたちがいました。

忘れぬこと

こんな私にも、思えばつかの間のしあわせはありました。

夫とともにおくりました、台湾での家族生活。

先にも申し上げましたように、私たちの結婚は昭和十三年七月二十七日でした。

縁あって結ばれたものの、写真結婚でした。一人で台湾へ渡り、花蓮港近くの一つの旅館で、心から迎えてくれた夫と心ばかりの結婚式をあげたものでした。

初めて会った夫。でも私たちがどんなに心を通じ合っていったか、とても人さまに話しても信じてはもらえないかも知れません。

それにつけても、長女の邦子が病気したときのことだけは忘れることができません。

恐ろしい乳児脚気とは知らず、ただぐったりとなってしまってお乳を吐きつづける幼な子を抱きながら、あっちの町こっちの町と医者をたずねてかけまわりましたけど、このときばかりは「ああもう、この子の命もこれでおしまいだ」と、何ど思ったか知れませんでした。

人のおかげで、ある医者の手でやっとのこと一命はとりとめましたものの、たまたま夫は兵隊にいっていたときでした。心配かけてはならぬと、あのとき私はとうとう手紙を書きませんでした。

ところがどうでしょう兵隊にいる夫から、「どうも邦子が病気のような気がする。何かあるはずだ。かくさずに、手紙をくれ」との便りだったのですよ。私はすぐことの次第とともに、「もう大丈夫です、安心して下さい」と返事をやることができましたけど、こんなことが、二度や三度のことではなかったのですよ。私たちの心は、手紙をださなくてさえ、またどんなに遠くに離れていてさえ、通じ合っていたのですね。そんな夫婦でした。その夫を、三井は私から奪いとってしまったのです。

心残りは？

夫は、たくさんの感想文を残しております。次女の恵子が申しましたように、「人にできることで、自分にできないことがあるか」が口ぐせで、それだけ何でも真剣にやる人でした。あくまで三池労組に残ってあの大闘争を闘ったのも、曲ったことの大嫌いな人柄がそうしたのですね。

いまも三味線が残っていますけど、夫は音楽好きで、バイオリン、ギター、ハーモニカなど何でもやりました。文字通り、自分の考えたことは実践しなければすまない人だったのですよ。

炭鉱賃金では暮らしが立たず、家族が一つになり、機械を家にもちこんでカマスも編みました。私が編めば、夫が縄をない、子どもたちができあがった製品の耳切り。

お酒が好きで、晩酌が欠かせない人でした。大爆発の前の日が、ちょうど私の金受け日（この頃今村さんは勤めていた）でしたので、せめてその晩だけでも心ゆくまでお酒を飲ませてやっていれば……。それがいま心残りでたまりません。どうしてか、年がたつほど思い出されてくる夫です。

×

今村さんのお住まいは「大牟田市神田町百二十三番地」